

---

## 特別講演会

---

---

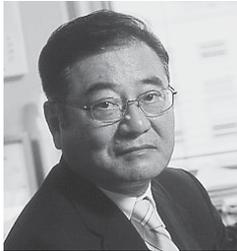
### 対中政策の現状と課題をめぐって 議員外交の視点から



加藤紘一  
衆議院議員

2007年12月15日(土)

◆講師



加藤紘一〈KATO Koichi〉

衆議院議員。1939年生まれ。東京大学法学部卒。ハーバード大学大学院修士課程修了。1964年外務省入省。在台北大使館勤務、在香港総領事館副領事、アジア局中国課次席事務官を経て、1972年衆議院議員当選以来、当選12回。この間、内閣官房副長官、防衛庁長官、内閣官房長官、自由民主党政務調査会長、同幹事長などを歴任。主な著書に『いま政治は何をすべきか——新世紀日本の設計図』（講談社、1999）、『新しき日本のかたち』（ダイヤモンド社、2005）、『テロルの真犯人』（講談社、2006）のほか、最新刊に『強いリベラル』（文芸春秋、2007）がある。

●—司会 ただいまから特別講演会を開催します。それでは、加藤紘一先生の紹介を、高橋教授からさせていただきたいと思います。

●—高橋（進行） 改めて私のほうからご紹介するまでもなく、皆さま方がよくご存じのとおりですが、一応形式もありますのでご紹介します。

加藤紘一先生の所属は自由民主党で、選挙区は山形県第3選挙区、当選第12回というベテランでいらっしゃいます。お生まれは1939年ですから六十幾つです。ご出身は山形県鶴岡市です。1964年、東京大学法学部政治学科公法学科をご卒業になられて、4月に外務省へ入省されました。1967年、ハーバード大学修士課程を修了されておられます。その年の6月は香港総領事館にお務めになりました。1972年12月には第33回総選挙に初当選、以後1978年には第一次大平内閣の内閣官房副長官をお務めになり、1984年11月に国務大臣防衛庁長官に就任されています。

さらに1991年11月、当時の宮沢内閣の内閣官房長官、1994年に自由民主党政務調査会長、1995年に同幹事長を歴任され、その後1998年、宏池会の会長に就任されました。宏池会というのは保守本流の自由民主党のなかにある大きな派閥組織です。そして2005年、第44回の衆議院選挙では12回目の当選をなさっています。

ご趣味は料理、読書とカラオケだそうです。今日はカラオケを一曲お願いしたいと思いますが、残念ながらその時間はありません。

昨年12月には講談社から『テロルの真犯人』、今年6月には文芸春秋社から『強いリベラル』という本を出版され、普段から執筆活動や数多くのテレビ出演を通じて活発な発言を続けておられます。

本日は、国会が風雲急を告げるという厳しい状況にありますが、ICCSのシンポジウムのためにわざわざお越しくださいました。演題は、「対中政策の現状と課題をめぐって——議員外交の視点から——」ですが、堅苦しい話よりも、加藤先生のこれまでの中国とのかかわりを中心とした自分史をお話しただければ幸いです。では、加藤先生、よろしく申し上げます。

## 特別講演

## 対中政策の現状と課題をめぐって

——議員外交の視点から——

## 加藤 紘一

〈衆議院議員〉

加藤でございます。お招きいただきましてありがとうございます。今日の会は、現代中国学、つまり現在の中国がどのようになっているのかという研究の場、それに関連した諸外国の学者の方、日本国内の有力な学者の方がお集まりだと、高橋さんから聞いておりましたので、喜んでまいりました。

実は私自身も、中国研究学徒の一人のような気分で過去35年過ごしてきましたので、なんだか私の学会というような感じで気楽に行ってみようと、皆さんがどのように研究しているのかなと思ったのが、今日来た理由の一つです。

それからもう1つ、実はあまり知られていませんが、私は名古屋生まれですが、選挙区では山形出身だと言っています。私の父親は、当時は中央官僚機構の中で大蔵省（現財務省）よりも権力のある内務省の役人でした。当時は、全国各地に若手を派遣して課長や部長をさせるのですが、その縁で父親が愛知県庁の庶務課長として人事と会計を仕切っていたポジションにいた1939年に、県庁官舎で私は生まれました。昔は愛知一中と言いましたが、今は明和高校になっているそう。その白壁町という由緒ある町で生まれていることもあって、名古屋は常に心が向くところです。

最近、中国と日本との関係は複雑な様相で

日々変化していますから、その現場にいて、ものを話したり、主張したり、ときには家につけられたりする経験を、皆さんにお話してみたいと思いました。高橋さんの示唆もありますので、なぜ、私が中国にかかわるようになったのかという部分をお話したいと思います。

## 中国との「出会い」——法眼氏の誘い——

「さて、どうしてだったろうか」と思い出すと1960年代には、60年安保闘争という騒ぎがありました。私が昭和34年（1959年）に大学へ入った翌年、安保改訂の大騒ぎという、われわれの世代からみると大変な学生運動でした。樺美智子さんという学生がデモで亡くなったり、いろいろなことがあった青春時代でした。

大学に行きますと「マルクス・レーニン主義、社会主義を信奉するのだからバカだ、知性のない人間だ」ということでしたが、家に帰ると父親は自民党の代議士なわけです。その父親は息子が「アカ」にならないようにと心配するわけです。一方大学に行けば、自民党の「じ」という言葉を言っただけで軽蔑されるようなところでした。

東京出身のこなれた同級生たちは「おい、加藤。学生時代は社会主義、会社に入ったら資本主義、それを仕分けして生活するのが人

間の知恵だ」みたいなことを言うのですが、私はやはり比較的きまじめに考える地域で育ちました。私は5歳から山形県の鶴岡市というところでずっと育ちました。『武士の一分』や『蟬しぐれ』だとか、いわゆる藤沢周平文学が描いている下級武士のきまじめさみたいなものが、私の町の雰囲気です。特に、藤沢周平が描く下級武士は、使用人が一人いる程度の50石の下級武士ですが、私のうちは150石ですから、市役所の庶務課長ぐらいのところですよ。本当の大名になると14万石、家老は2千石、とんでもない大きな家老もあるわけですが、そのような下級武士、下級官僚の家に育ったきまじめさみたいなものをわれわれは持っているわけです。

大学時代は学生運動をやって、就職したら適当に現実的にやれというのは何かしっくりきません。ですから、まじめに考えてしまいました。19歳、20歳で日米安保条約が正しいか、資本主義体制が正しいかを考えても結論が出るわけではないのです。

私の日比谷高校時代の同級生に有力外交官の息子で法眼俊作がいました。これが大学4年生になったときに親の言うとおりに自分は外交官になるといって外交官試験を受けてさっと通ってしまいました。その彼が、「おまえは今後どうするのか」と言うので、「新聞記者になりたい」と言ったら、「受かるのか」と聞くので、「受かるわけがない」と。当時、官僚になるのも嫌だ、資本家の手先になってサラリーマンになるのも嫌だみたいな者が新聞記者にあこがれていましたから、100倍ぐらいの競争率でした。それを相手に人生を考えるわけにはいきません。すると法眼が、「外交官になれよ。あれは一生懸命に勉強すると受かるんだよ」と。そんなものかなと思ったのですが、自分が使った受験ノートを

全部貸してくれるというのです。そして、「おれは外務省に入ったら、ロシア語を勉強して日本とロシアの関係を一生のライフワークにする。おまえもどうだ。おまえは中国を担当してやらないか。おれとおまえで日本の中ソ外交を仕切ったら、この国を仕切れるぞ」みたいな大きなことを言うわけです。

やはり東京で育って外交官の幹部の家に生まれると、こんなものなのかなと思ったものです。山形県の小さな藩から出た下級武士の家にはそんな精神はないなと思いつつも、「じゃあ、やるか」と、やっと、よたよたと合格したわけです。

#### 外務省入省——中国選択はたった1人——

外務省に入ったときは21人の同期生がいましたが、そこで、「あなたは、どの国をやるのか」と問われました。すると相変わらず英語をやりたいというのが10人、フランスに行きたいというのが5人、それからドイツ語というのが何人かいたなかで、中国語1人、ロシア語1人とアラビア語1人ということになりました。

私は、中国語は絶対に希望者がたくさんいると思いました。なぜかというと日本と中国の関係はこれから大変になるし、安保論争でもわかりますように社会主義国家は体制が違います。そのようなところとの関係はもめて難しいはずですから、外交として一番面白いと思ったからです。

日米のような話は、お互いに大して価値観も違わないということであれば、外交としてはあまり面白くないはずですよ。問題がある地域を選ぶことが一番面白いはずですよ。競争相手は何人かなと思って手を挙げたら、中国語は競争相手がいませんでした。一人だけで、どうぞみたいな話でした。最初に研修に行く

ところはどこかと言えば台湾というわけです。当時、中国との間には国交がありませんでしたから、生きた中国語を学ぶには台湾へ行くしかなかったのです。

外交官になったら誰もがロンドン、パリ、ニューヨークと思うときに、台湾に行くというわけですから、「おまえは外交官21人中、一番成績が悪かったのではないか」などと家の人間は言いました。「まあ、見てな」という気持ちで、中国の勉強を始めたわけです。

当時、大学の研修指導員に衛藤藩吉という人がいて、「よく選んでくれた。将来、日本と中国の関係は大変で、今、日米の貿易を見ると貿易額の3割がアメリカにいつている。だから、アメリカの言うことは聞かなければならない。将来、日中貿易量が日本貿易のなかで3割を超えたときに、日本は中国にものを言えなくなる国になる可能性がある。だから、その危険性を頭に入れながら日中関係はどうあるべきか、しっかり君はやってくれたまえ」と言っていました。中国に関する大学教授ともなると、かなりスケールの大きいロングタームのことを考えるのだなと思いました。そして、自分の選択に迷いなく勉強を始めました。

当時の外務省の研修所は、新人を、半年ほど研修させてすぐ外国に出します。その研修所は、東京文京区茗荷谷にある旧東方文化学院のなかにあります。そこへ行くまでに約500メートルある小道を通っていきます。向こう側から跡見学園女子大学の生徒が来るわけです。その女の子たちの視線は決して私には向きませんでした。なぜならば、私が持っている勉強の道具は、和綴りの漢文の資料や漢字で書いてある中国語の書物でした。同期の林君などはスラリとしていて、フランス語などの本を持っていました。すると、そちら

のほうに当然ながら彼女たちの目が向きました。それを見ていると、選択を少し間違えたかなと思った瞬間もありましたが、そうこうしているときに外務省研修所10周年式典がありました。吉田元首相が式典に参加してくれるというわけです。吉田茂と言えば、戦後の日本外交の教祖さまです。その教祖さまがおいでになる式典だというわけで、汚い研修所をみんなで一生懸命に磨いたり壁を塗り替えたりして、吉田元首相の到着を待っていたのですが、川島正次郎さんが突然亡くなって葬儀がはいり、吉田茂さんは1時間半遅れて来ました。

そして、研修員21名とほかの役所から海外に派遣される研修員とで50人、60人でしたでしょうか。小さな講堂に入っていて、吉田さんが来られたら、みんな緊張してぱっと起立しました。研修所所長が「礼」と言うとはっと頭を下げます。所長が、「総理、研修員を座らせてお話を聞かせてよろしゅうございますか」と言いました。

すると、吉田さんは何も聞いてないような顔をして話し始めました。「この研修所は私が創立しました。理由は、皆さんに外交のことをしっかりと考えて勉強してもらいたかったからであります。政策を勉強していただきたい、プロトコル（protocol：外交儀礼）



なぞつまらんことは勉強する必要はありません。勉強してもらいたい政策のなかでひとつだけ一番重要なのは支那のことであります。日ごろの所感を述べて終わります」。それで、すたすたと帰ってしまいました。「政策を勉強して欲しい、そのなかで一番重要なのは支那のことであります。日ごろの所感を述べて終わります」。これだけのメッセージで帰ってしまいました。「吉田書簡」などを研究されればわかると思いますが、吉田さんも、本当は中国大陆との国交が重要だと思っていたのだと思います。

「朝鮮戦争が始まり事態が変化したなかで、日本は台湾を外交の相手として選択せざるを得なかった。しかし、これでいいのか。流れはそれでいいようにはいかないはずだ。そこをどのように打開していくのか。若い外交官の卵よ、そこを考えろ」ということを言ったのだと思います。

その日、私は下を向いて、「ほら見ろ、跡見学園女子大学の女の子は、おれには目を向けられないけれども、おれのほうが正しいのだ」というような気分浸ったのです。ずっと勢い込んで2、3カ月後、台湾に行きました。研修所に入って24歳から勉強した中国語ですから、当然、たどたどしいなかで台湾に行ったわけです。一方、中学1年から英語を

勉強していましたから、12年は勉強しています。でも、英語を話すのはつらいと思いました。

その台湾に行った初日は6月ですから、わっと熱い風が吹きました。現地では、台湾ツツジ（杜鵑花）が真っ赤に咲いていました。そのようなときにホテルに一人だけ置かれて、おなかがすいて食堂に行ってみると、昼下がりで客もいません。若いウエイトレスが一人だけいました。「おなかがすきました」と言うと、「何を食べたいか」と言うので、「我想要吃面（麺を食べたい）」「什么样的面呢？（どういう麺か）」と。「什么？（何?）」と言いました。「麺と言えば麺じゃないか」と思ったのですが、彼女は「汤面呢、炒面呢（スープに入っているのか、焼きそばか）」と聞いたのです。そこで「汤面（タンミェン）」と言ったら通じました。「要放什么东西？（何を入れますか?）」というので、たどたと「牛肉（牛肉）」を食べたいと言いました。「好的、等一会儿（わかりました、少しお待ちください）」と言って戻って行きました。これが通じたとき、人生でこんな幸せがあるかなと思うぐらい、うれしくて、私はアジア人、彼女もアジア人だから、私に劣等感を抱かせないようにしながら話してくれたんだなと思いました。

これがアメリカなどに行ったら、きっと恥のかき通しになるのではなかろうかと思いました。自分が中国語や中国関係を選んだことを、「まあまあ、いいじゃないか」と、合点した次第です。私が人生を選ぶとき、日本の外交はどうあるべきか、社会主義かどうか、その悩みのなかから法眼というロシアを扱う友達に引っ張られて中国を選んだけれども、「うん、理屈はともかく、これは面白いわ」と思い、その後、ずっと中国を一生懸命に勉



強するようになったのです。

そのときにもう1つ考えていたことは、衛藤さんが言ったように、10年後ぐらいには日中の貿易関係が非常に緊密になると、日本の自主性をきちんと守れる日中外交ができるかどうかという問題。それから、アジアのなかで日本と中国がもっとも大きな国だろうと言う点です。当時、インドはまだ国際的にも、経済的にも目立つ存在ではありませんでしたから、そのアジアのなかで大きい日中という存在が争いを始めたら、ほかの国々がどうしたらいいかわからなくなってしまうと、だから、争いをしないようにしなければいけないと思ったものです。

これは現代にも通じているテーマですが、私が21歳、22歳の未熟な頭のなかで考えたことは、誰でも考えることであり、そのとおり何十年も同じようなテーマで生きてきて、そして今はっきり、その正しさに確信を抱いています。

しかし、日本と中国の貿易量は、日本とアメリカの貿易量よりも多くなり、それと同時に中国に対して日本はもっとしっかりと主張すべきだとか、日本と中国の関係をどうすべきかについて、しっかりとした座標軸がまだ生まれてないという点も事実です。政治家も外交官も、言葉ひとつ行動ひとつについて、「おまえはどうだ、あいつはどうだ」というような個人評価をやっているのではないのでしょうか。

私にいたっては、以前から親中派だと言われていました。最近はさらに「レベル」が上がって、媚中派だと、中国にこびを売る政治家みたいなことになりまして、「あいつは家を焼かれても当然だ」みたいなことを言われるようになっていました。

### 中国語について

中国語についてですが、台湾で2年、徹底的に勉強しました。言葉というものは面白いもので、あるところまではグイッと伸びます。それから、あるところまでくると平原みたいになって満足してしまいます。そこから先にさらに伸ばそうというときに、意欲を持つかどうかで一生が決まるのではないかと思います。

私の中国語も役人時代にも勉強していましたが、言葉は使っていないとなかなか駄目ですね。年に一度ぐらいは中国に行って講演をさせられるときがあります。そうしますと、30分ぐらいの中国語の演説を書きます。日本語でやるというと中国の人は、「あんたは中国語ができるのだから、そのまま中国語でやってください。その方が心が通じます」みたいなことを言われて、ついその気になって「では、やりましょうか」ということになってしまいます。ところが、四声（しせい）が緩んでいるのですね。「鉄道」と言うときに、昔は「ティエル（tielu）」と四声をきれいに刻んでいたと思うのですが、何年か使っていないと四声が出なくなっています。1年に一度、錆を削ぎ落とす機会を自分に課しています。

去年の12月に、北京大学の日中関係学科の人に話をしてほしいというので行きました。講演をたどたどとやりましたが、そのあと質疑の時間がありまして、質疑については通訳をお願いしました。しかし、聞いているうちに、たどたどしいものでも、直接答えたくなりますね。そうすると、あとは運の尽きで通訳なしになってしまうのですが、やはり通訳なしでも会話をすることが、ものすごく交流するにはいいです。ですから、皆さんも中国語を勉強されている人であり、また流暢



に話せる人もいられるでしょう、まずまずの人もいれば、自信はないけれどもやってみたい、でもやるのは嫌だという人もいます。しかし、できるだけ自分に無理を課してやってみることによって、日中の交流は深まるのではないかと思います。無理だなと思ってもまずやってみようという気になると勉強もするし、それでやってみると結構うまくいきます。うまくいかなくても心は間違いなく通じるというような感じだと思います。

台湾に2年いて、それからアメリカのハーバード大学に1年送られました。そのときは1966年から1967年です。現代中国を勉強されている方にとっては大変なときですね。要するに文化大革命の始まりです。中国の内情がわかる資料のない時代でしたが、文化大革命が起きると中国内の規律が緩み、ありとあらゆる秘密文書、行政内部の文書みたいなものが流れ出しました。それを当然のことながら台湾の蒋介石政権の情報部が集めてきて、そのコピーを米国政府に渡しました。

そして、米国の中国分析学のメッカは、ハーバード大学のイェンチン図書館(Harvard-Yenching Library)ですから、そこに全部届きました。そこに私がたまたま行ったわけです。ハーバード大学のイェンチン図書館にある地域学(regional studies)に入り

ました。中国語で全部書いてあるため、アメリカの学生や学者が読もうとすると大変ですが、私は漢字のわかる日本人で、さらに台湾に2年いたわけですから、かなり早く読むことができました。そして、約1年のレジデンス(residence)でマスターをいただきました。そのテーマは「中国農村における社会主義教育運動、文化大革命の前段階のプロセス」などという学問的な名前をつけました。

文化大革命の前には、農村において、自由主義のように規律をやぶっていいのか、そこで毛沢東が声をかけて、農村における社会主義教育をもう一度やらなければいけないという運動がありました。そういう内容の研究をやりました。それで、一応マスターをいただきましたが、そのときに、学問は面白いものだった記憶があります。

私はどちらかというと優等生タイプなものですから、日本の小学校、中学校、高校、大学とまじめにきちんと過ごしてきましたが、勉強を面白いと思ったことはありません。なぜかと言うと、いろいろな学者の書いたものをしっかり理解して、継ぎはぎして論文を書く「優」をくれるのが日本の社会です。その感覚で、私はハーバード大学での一年間にペーパーを書きました。盧溝橋事件の前後、なぜ日中は戦ったのかとことを書いて提出したら「Dマイナス」と書かれました。

「あなたが書いたものは、いろいろな学者さんの引き写しとパッチワークじゃないか。こんなものは学問といわない」と言われました。そう言ったのは、エズラ・ヴォーゲル(Ezra F. Vogel)さんのコースの下にいるティーチング・アシスタントです。

要するに、マスター(修士)を取得して、これからPh.D.(博士)を取得するために勉強している人たちが、アルバイトがてらマス

ターコースにいる私たち若い者を一生懸命に教育指導するわけです。

「いいですか。そのときの日本のリーダーたちがどう思っているかという日記を読んだり、その当時の新聞を読んだり分析して脚注を付けなさい。それでなければあなたの研究にはならない」というようなことを言われて、「へえ、そんなものか」と思いました。

ハーバード大学のイェンチン図書館には、膨大な古い新聞が索引付きであります。それを見ながら、では、このときの近衛さんはどうなのだろうかとか、いろいろ研究しているうちに、なにか推理小説を解いていくみたいな面白さを感じました。それでやっといい成績をもらいました。外務省に戻らずに学者になるわけにはいかないだろうか、と思うぐらい充実した1年でした。

#### 政治家へ転身

その後、私は政治家になりましたが、そのときの1年の教育が、私の政治生活に多大な影響を及ぼしていると思います。例えば、健康保険制度にしても、年金制度にしても、有力な優秀な官僚がいくら説明してきても、「おかしいじゃない、納得できない、私が納得できなければ、これをもって選挙区に帰って、有権者に説明しても有権者は納得しないよ。なぜならば、私が納得してないのだから。で、どうなの」と。恥ずかしげもなく社会保障制度についてまったく知らない議員1年生の私が、厚生労働省の担当課長や財務省の年金財政の人に質問していくのです。

すると相手の表情が、嫌なことを聞いてくるなという感じになります。「あれ、もしかすると、この人たちが言いたくないことを質問しちゃったみたい」。ということは何か面白いことがあるかもしれないということで、

ハーバード大学時代の推理小説を解くような追究、研究の仕方になっていきました。

それで、私は当選後6年くらいのときに、「役人の年金はなぜ高いのか。一般サラリーマンの年金はなぜ安いのか、すごい差があるではないか」と。年金の官民格差論をやりまして、当時は私の名前がメディアに載りました。それがきっかけになり、「あいつは政策論をやると、かなり役人を打ち負かすぐらいしっかりやるらしい、少なくともそちらの方では使えるな」という自民党のなかの先輩からの評価を受けました。つまり、やはり真実追究や自分にわからないことは聞いて回ることが一番重要なやり方です。

もう1つ聞きましたのが、イラク戦争のときです。私は故あって1年半ほど議員を辞職していた間、アメリカのコロンビア大学で Visiting Scholar Professor (客員教授) として、日本政治経済学を教えてほしいということで、ジェラルド・カーティス (Gerald Curtis) さんに、ある意味ではだまされて、彼と一緒に英語で授業をするようになりました。英語で授業をするなんて、とんでもない話です。山形県の田舎では庄内弁で選挙運動をして何十年と経っていますから、少し無理でしたが、生徒が集まったからやってほしいということでやり始めました。

そのときに何をやったかということ、毎日、テレビで CNN (Cable News Network) や CSPAN という政治英語ニュースのテレビを見ていたときに、サダム・フセインが「本当に大量破壊兵器がないと言ったらないのです。どうしても信じないのなら、私たちの大統領官邸にある宮殿へおいでください。そこまでも見せますよ」と言い出したのです。そのときに、アメリカの政府筋の人たちは、「まずいことを言うな」と暗い顔をしている

様子がテレビに映し出されるのです。大量破壊兵器があるとアメリカは主張しているけれども十分な自信がないのだと、もしかしたらアメリカも失態を演じる国かもしれないと思いました。どうもこれはひどいミスになるぞと思いながら見ていました。案の定、大量破壊兵器はなくて、ブッシュ大統領はいま泥沼のなかにいます。

政治外交を見るときには、やはり自分の目で、自分の意見を言うときは、学者やアカデミアにいる人たちと同じような気持ちで冷静に見つめていくことが、政治家にも必要だし、そこで自信を持てば自分のメッセージを非常に強く出し、ぶれずにやることになるのではないかと考えています。

#### 日本と中国

さて、日本と中国の関係はどうあるべきかということに触れさせていただきますが、最大の問題は歴史認識の問題です。結論から言えば、明治維新以来、日本はこの国をつくりあげ、欧米植民地から守ろうとしました。そして、日清戦争、日露戦争で勝ち、欧米を追い払ったと思ったあとに、日本は少し間違いを犯していたように思います。特に1905年に、日本はロシアに勝ってポーツマス条約を結びますが、それから10年、日本にとって大事なときだったのに、「よかった、よかった」と少し喜びすぎたと思います。

そして1915年、対華21カ条要求を出します。そして、満蒙の権益は守る、それから中国のいろいろな意味での検察権をよこせとか、いろいろなことをしますが、あの瞬間、欧米列強の植民地主義から守ってくれるアジアのリーダーは日本だったと思ったのに、「そうですか。日本も植民地主義を始めたのですか」というところで、対日反感が生まれ

始めました。そしてその後、頼まれもしないのに中国に軍隊を送り、その結果、何百万人なのか、一千万人単位なのか、歴史の考証を待たなければいけないですが、多くの死者を出すような結果になりました。要請もされないので軍隊を出して相手側に死者が出たとなれば、やはりこれは我が方の間違いと言わざるを得ないと思います。

そして、これは田中首相が日中国交回復のとき北京に行き、「ご迷惑をおかけしました」という言葉になったわけですが、通訳の小原君は、私の下にいた中国語の上手な男ですが、あれはいろいろみんなで相談した結果、「给你麻烦（いろいろご迷惑をおかけした）」だったのでしょうか。「麻烦（máfan）」で済む話ではないと思ってテレビで見っていました。

それ以外の言葉があり得たのか、日本の雰囲気から考えるとあまり強い謝罪の言葉が言えなかったですから、「麻烦」にしたのでしょうかけれども、少しまずい言葉だったなと思います。

1931年に、石原莞爾が満州事変を起こします。満州事変を起こした人は、のちにA級戦犯として処刑されました板垣征四郎と関東軍参謀の石原莞爾です。石原莞爾は山形県鶴岡市出身で、私の父親とはまたいここに当たります。ですから、私は石原莞爾の七親等になるわけです。どこかこのへんに血が混ざっているわけです。大変優秀な軍略家であり、歴史家であり宗教家ですが、石原莞爾がやったことがよかったかどうかは、われわれの地域の人、家族にとっても大変なテーマではあります。ですから今、われわれの地域ではあまりこの問題にふれないという日々を送っています。あえて言えば、石原莞爾は、その後、「あんな闘いをしてはいけない」と言って東條英機に疎まれて左遷され、終戦直前は

山形県の農場で隠遁の生活を過ごします。

ですから、A級戦犯にはされていませんが、満州事変を起こした瞬間のことを考えると、やはり間違えたのではないかと思います。なぜ間違えたのか、日本は1915年の対華21カ条要求のときから下り坂になり始めていました。日中関係としては悪化の下り坂に向かって傾いていたというなかで、石原は、自分としては垂直に立って垂直な判断、政策をしたつもりだったのではないかという気がします。

ですから、われわれ政治家は自分が置かれている状況が、短期間で正しいというだけでなく、長期間で見ても正しい状況にあるのか、現在この時点の状況を長いスパンで判断する力を持たないと、大きく誤ってしまうこともあるということです。

### 現在の日本の問題

#### ——3つのナショナリズムと展望——

まったく違う話ですが、現在はグローバリゼーション (globalization) の波が拡大し、流通も全部スーパーに替えていき、すべてを競争原理で地域社会が壊れてもいいから競争させるような時代になってきました。最近では地域ごとにつくられている公立小学校、中学校も全部バウチャー (voucher) というクーポン券を渡して競争させて、とてもいい小学校だと思えばそちらへ行ってもいいという、そして地元の小学校に子どもがいなくなっても、それはマーケットメカニズムだから仕方がないという議論までしているというのは、やはりどこか間違えたところがあるのではないのでしょうか。そこに気づかなければならない時に来ているのではないかという気がします。

そして、ナショナリズム (nationalism) に

ついて言えば、私は35年ぐらい政治家をやっている、ナショナリズムには3つの側面があると思います。1つのナショナリズムは、戦うナショナリズムではないかと思えます。つまり、ほかの国を攻めて領土を取ること。尖閣諸島も北方領土も絶対に自分のものだと言って、こちらも主張するし、向こうも頑張るという戦うナショナリズム。これは政治的には非常に効果のあるナショナリズムです。これを沸き立たせると、「総理大臣、頑張れ」「サッチャー、頑張れ」、もちろん「ヒトラー、頑張れ」みたいに国をまとめ上げる力は強烈なものです。

この戦うナショナリズムは本当に人々をまとめます。皆さんの家でも、奥さんが言うことを聞かないとか、娘がわがままばかり言っているとか、家中バラバラだと思ったら、それを直す有効な手段が1つだけあります。それは、隣のおやじと罵り合うことです。

「おたくの犬がうるさくて、おたくのお嬢さんは毎晩ピアノ弾いて眠ることができない、だから壁でもつくれ、でなかったらもっとピアノがうまくなれ」のようなことを言うと、向こうが「何を」と言ったらしめたものです。こちらは「お父さん頑張ってよね、みんな頑張ろう」のようなことになるのですが、あとの始末が大変なナショナリズムです。

2番目は、競争ナショナリズムがあります。これは私のネーミングです。例えば、オリンピックの女子フィギュアスケートで、ご存じの浅田真央ちゃんが今度は出場権ができるとか、イナバウアー頑張れとか、それから南アフリカで開催されるサッカーのワールドカップ、もうコンビニエンスストアでアルバイトして、シュラフ (寝袋) を持って応援に行くとか、ほっぺたには日本国旗をフェイス

ペインティングして頑張れと、これはいいナショナリズムだと思います。「学業成績を頑張れ」、それから「経済成長、頑張れ」のような、これは前向きにお互いにやって、そして負けたら自分をもっと頑張ればいだけですから、健全なナショナリズムとみていいと思います。

もう1つ最後に、理想のナショナリズムがあると思います。それは誇りのナショナリズムというものでしょうか。わが国では、これが誇りだというものは何でしょうか。アメリカ人は何を持っているかという、リベラル・リパティー・自由が誇り、フランス人はフランス語に表現される文化の繊細さ、美しさがフランスです。本当かなと思うのですが、フランスの人はそう思っているから本当なのでしょう。そのような誇りのナショナリズム、ナショナル・コンセンサス (national consensus)、アイデンティティー (identity) が力強くなったときの輝きだと思います。

#### 自然環境と共存する日本を ——中国の目標に——

先日、韓国に行くとき飛行機に乗ったら「韓国。夜明けの国」と、これは航空会社のパンフレットですが、1つの言い方だと思います。スリランカの大使館に招かれて、あるイベントに参加したら、何と書いてあったと思いますか。「スリランカ。自然に最も近い国」、これはカッコいいなと思いました。つまり自然と同和している国ですという意味でしょう。日本はそのようなときに何と書くのでしょうか。JAL (日本航空) は何と書いてあったのか、あまり印象に残りませんでした。

「杜の国」ということを言う国会議員がいました。愛知和男さんという仙台の国会議員

です。それを今、みんなで考えなければならぬときです。だから、藤沢周平も司馬遼太郎も、この国のかたちはどのようなものだと考えたのでしょうか。本屋へ行く人はみんな考えているのではないのでしょうか。私は、日本はもっとも強く自然を崇拝する国のようなところに行くのではないかという気がしています。

パレスチナの地に行きましたら、あの地域の人はパレスチナの砂漠のなかから、ユダヤ教徒、紀元前3,000年ぐらいしょうか。紀元〇〇年にイエスキリストが生まれてキリスト教が、そして700年ぐらいして分家でイスラム教が生まれました。よく見ると全部一神教です。

フェニキアの人たちが、山の木を全部切ってしまったため保水能力がなくなり、土漠砂漠になってしまいました。そうすると信じられるのは、お天道さまだけ。ですから信じはめたら一神教できつい、同じ一神教の人たちがユダヤ、キリスト、そしてイスラム。これは親せき縁者ですから、親せき同士のケンカというのは始めると、もうどうしようもないほどケンカしますね。皆さんの近辺でもそうではありませんか。非常にきつい宗教になっています。

一方、われわれは紀元前3000年も前から今でも、あちらの山を見れば緑が茂り、鳥が鳴き、つかまえば食べることができます。秋にスモモ、栗、平野には雑草、稲が生えて食べることができます。川には水が流れ、その豊かな水のなかに魚がいます。この自然というものと調子を合わせて生きていった方がいい、尊敬していった方がいいというのが日本の原点だと私はそう思います。

ですから、何でも神さまにしてしまいます。あちらの山も神さま、こちらの山も神さ

ま、昔は家のなかに山の神という非常に恐い神さまがいて、大変な権威をふるいましたが、若い人たちにはわからない表現でしょうね。

山川草木悉皆全部神、石にも神がいます。水にも神が宿っています。要するに自然を壊さないで尊敬していきましょう。このようななかで日本人のメンタリティーはできているのではないのでしょうか。そのへんがきちんとまとめられたコンセンサスのようなものに昇華して集約されていったときに、私たちの国は非常に落ち着いた社会になっていくのではないかという気がします。

そのようなときに、中国の神は何でしょうか。これはわかりません。皆さんは現代中国学の研究者ですが、マルクス・レーニン主義があり、毛沢東イズムがあり、その中国の原点がよくわからないかたちで、40年、50年が過ぎてきました。それが開放され、いろいろ動くなかで、北京の街中をどんどん壊して新しいビルを建て、どうも中国は自分を見失いつつあるような非常に心配な状況になってきました。いずれ中国にも対欧米や対日本、豊かさ、キャッチアップだけでは物足りないときが必ず来ます。

そのときに、失ったものと、もう一度回復させなければならないものという大テーマに

中国がぶつかっていくのではないのでしょうか。そのときに、どのような動きが社会のなかに生まれるのでしょうか。現代中国学のテーマは、多く深く面白いと思います。

どうぞ私も、この学会の一員として隅にいていただければ、ぜひときどき参加させていただきたいと思います。この学会シンポジウムの大成功をお祈り申し上げる次第です。どうもありがとうございました。

\* \* \*

●—高橋 加藤先生、熱弁をふるっていただきまして、大変私自身も感銘をいたしました。それでは短い時間ではありますが、せっかくの機会ですから、フロアから質問を受けたいと思います。どなたでも結構ですので、挙手をお願いしたいと思います。すみませんが、お名前をおっしゃっていただけますでしょうか。

●—岡田 名古屋商科大学の岡田です。2つばかり少しおうかがいしたいと思います。1つは、先ほどおっしゃった謝罪問題です。例の小原さんの「添麻烦（迷惑をかけた）」です。田中・毛沢東会談で、田中角栄がお詫びをしたときに、毛沢東は、「いや。もうこちららむしろお礼を言いたいぐらいですよ。日本軍の武器で、われわれは国民党と戦ったの



だから」というお話をしていました。もちろん、それはジョークが多かったと思うのですが、なぜあれを文書にしなかったのかと思います。もう1つ、議員外交の視点ということです。二元外交の在り方について、ご見解をいただけるとありがたいと思います。

●—加藤 日中国交回復のときの田中毛沢東会談がおこなわれ、「添麻烦」と言ったのは、夕食会のスピーチだったように思います。確かに文書化にはしていませんが、そのようなものは全部記録にとって外交文書のなかに当然入っています。公刊公文になろうとなるまいと、総理大臣がオフィシャルなディナーでテレビの前で話したことは日本の意思表示とっていいわけです。文書のあるなしにかかわらず、あの部分は日本人が言ったことだと見るべきだと思います。

それから毛沢東については、あれは日中のときでも日韓のときでも起こるのですが、こちらが謝ると、「いやいや、そうはいつでもわれわれもいろいろありましたから」というようなことを言うのは、アジアの人間のある種の礼儀で、そのようなことを言い合う関係になったら素晴らしいですね。

私が感動したのは、金大中さんが大統領になって日本に来て、国会で演説したときに、彼はこう言いました。「日本の国会議員の皆さん、韓国人が自分の名前を持ちながら日本に植民地化されたときに、その名前を捨てて日本の名前を持たされました。その民族の心の傷、あなたたちはわかりますか」と言ったあとに、「しかし、私たちは思います。そんなことをさせられざるを得なかった私たちの国の歴史の弱さも反省しなければならないと思っています」と言ったときに、日本の与野党の国会議員は負けたと思いました。

こちらは、謝ったと言いたいとか、言いた

くないとか、細かなことで与野党や自民党のなかでやっているときに、相手の大統領がそう言ったのです。一字一句計算して、よかったとか、悪かったと言うのも重要ですが、それより「ああ、日本は大きいね」と言ってもらえるような外交をしてくださいと言われる。

例えば、中国に対して30年、円借款をお貸ししたわけです。「ありがたかった。そのおかげで、この橋ができた」ということを橋のたもとに書いてあるとか、ないとか。このようなことでわんわんやっていますが、あのときに借款を出そうとした思いは、それによって、あの国の経済が発展すれば改革されて、自由主義のわれわれと同じような体制になるはずだと。そして、われわれに近づいてきます。そのとおりになったではないですか。その大きなところを忘れて、細かな議論をするということが正しいのか、というテーマなのではないかと思っています。

それから二元外交の話はよく言われますが、日本はそんなに二元外交になっていないと思います。例えば、北朝鮮の問題についても、かつては社会党の田邊さんが行ったりとか、しかし、みんな外務省に連絡されて、最後は集中してコントロールしています。

最近の二元外交で、私は残念だなと思うのは、小泉さんの対朝鮮外交と、そのもとで官房副長官や官房長官をやった安倍さんとの意見の違いです。これは大きいです。

二元外交というのは政府と野党。それから政府と自民党の一部の先生方が勝手なことをやっているというような二元です。過去5、6年の対北朝鮮外交は官邸内の二元外交です。

北朝鮮が、なぜ小泉さんに来て欲しいと言ったかという、アメリカが怖かったのだ

と思います。アメリカのブッシュさんが世界には3人の悪いやつがいると、1人はサダム・フセイン、これは死んでしまいました。2番手は金正日です。3番目がイランの指導者です。金正日にしてみれば、アメリカはリビアのカダフィをやっつけようとしたときには、ピンポイントでミサイルを打ち込みましたから、自分のところにも打ち込まれる可能性もあると。「surgical attack」「surgical diplomacy」と言って、外科手術的な攻撃のことです。それは指導者の家を攻撃（爆破）することです。これはリビアのときには失敗しましたが、最近、イスラエルがシリアの核施設を攻撃したときには、ブアッと全部なくなりました。なぜかという、シリアのなかにスパイを入れて核施設に発信器をセットしてミサイルを撃つわけです。見事な誘導ですから必ず命中してしまいます。跡形もなくなってしまいます。それをやられるかもしれないと、金正日も考えたと思います。

ですから、小泉さんに来てほしいと、アメリカとの間に立ってほしいと。そして、拉致については謝るということを、田中均に言って実現しました。本当は、北朝鮮は中国や韓国よりも、日本に頼って今後は進みたいと思ったのだと思います。

ですから、安倍さんが小泉総理について行って、「総理。もうやめましょう。帰りましょう」と言って帰ってきました。小泉さんがやった外交と違うことをやって、ワイドショーで人気を得て総理になってしまったけれども惜しかったと思います、小泉さんがあのままいけば、北朝鮮は今後日本との協力関係で生きていくという国になりえたと思います。六者会談は、北京ではなく東京でおこなわれた可能性さえあると思います。

ですから、いろいろなところで、われわれ

はいいチャンスを逃しています。それはこれから考えていかなければならないところだと思います。

●—高橋 どうもありがとうございます。時間の都合もありがとうございますので、あとお一人、どなたかいらっしゃいませんか。では、李さん。

●—李 愛知大学の李春利と申します。今日は貴重な話をお聞かせいただき、本当にありがとうございます。いろいろ勉強になりました。2つだけ、おたずねしたいと思います。せっかく今日は議員外交という話ですので、日中関係がここまでこじれた理由について、日本側の視点からその社会的あるいは政治的な構造と絡んでひとつおたずねしたいと思います。

1989年のベルリンの壁崩壊以降、ここ20年近い間、日本社会の構造をみますと、ひとつの大きな特徴として、革新勢力の後退というのがあります。それはマルクス・レーニン主義だけではなくて、社会全般にわたってそのような流れがあります。私もちょうどこの期間中、日本におりましたから、いわゆる保守勢力の声が大きくなったというよりは、むしろ革新勢力の声が小さくなったことによって、中国やアジアから見て保守勢力の声が余計大きく聞こえました。それを打ち消すだけの革新勢力の声が弱くなったということでもあります。

そしていわゆる「55年体制」の崩壊で、自民党のなかの保守的な、あるいは社会のなかの保守的な勢力の声を打ち消すだけの力がさらに弱くなりました。以上は1つの個人的な見方ですが、これについてご見解をお聞かせいただければ幸いです。

もう1つおたずねしたいことがあります。加藤先生が、おそらく一番お詳しいかと思

ますが、小選挙区制の導入です。たしかに1994年のことだと思います。そのとき、加藤先生はおそらく幹事長のお立場におられたのではないかと思います。その前の中選挙区制のもとで、2人ないし3人は立候補で当選する可能性がありました。

そのとき、日本社会はもっと寛容的だったわけですね。それ以降は、小選挙区制のもとでは一人だけが当選するわけですから、より無難な人を選ぶ、よりリスクの小さい立候補者を選ぶ傾向が強まってしまいます。それは結果として、二大政党制になりつつありますが、全般的にみて自民党だけではなく、民主党も保守的な方向に傾いてしまいます。

そのことをアジアから見れば、日本全体が右傾化してしまうと映ってしまいます。マスコミも特にその部分を大きく取り上げています。そのあたり日本国内の政治と社会の構造的な変化が日本のアジア外交や対中関係に与えた影響について、内側から何かコメントしていただければありがたく存じます。

●—加藤 日本社会および政治問題についてのかなり深い質問だと思います。と同時に答えにくい質問でもあります。やはり戦後は、東西冷戦自由主義の全陣営と社会主義陣営の国際的な対決の国内版としての55年体制、自民と社会の対決、保守と革新の対決だったわけですから、それが40年、50年続いたあとに、突然ベルリンの壁が崩壊してロシアで社会主義はもう駄目だと言われると、それは日本国内の革新陣営はたまったものではありません。

体勢を立て直す気力がないなかで、自民党万々歳のような10年、15年が続きました。それによって、どちらかというと自民党が押し寄せ押せになって、そのときに中国が経済的には改革開放で、世界の工場になる日本の雇用

を持って行くみたいなことですから、それが反中感情のように悪いナショナリズムになっていきました。このプロセスは困ったことだけれども、自然の流れでそうなったと思います。

それで小泉さんは、それほどナショナリズム右の人の政治ではないのですが、その末期から安倍さんを中心にとんでもないかなり強いナショナリスティック (nationalistic) な右寄りの政策になりました。しかし、半分は心配していましたが、半分はそんなに長く続かないだろうと思っていました。長く続かないと思ったのは、国際社会のなかであの議論は通じないのです。

例えば、中国と政治的にケンカをしてもいいから、インドとオーストラリアとアメリカと日本の4カ国で組めばいいという議論をしても、インドは「嫌だよ」と言うし、オーストラリアも「それはやめたほうがいいのではないの」と言うし、アメリカのライス (Condoleezza Rice) 国務長官は、「少しご慎重に」と言うし、あれほど日本の外交が恥をかいたコンセプトと戦略はなかったと思います。

それから一方、非常に中国にナショナリズムでけしからんと、靖国神社参拝に文句をつけると、靖国神社の何が悪いのだという議論を続けていましたが、遊就館という歴史博物館が靖国神社の境内にあるわけですが、ぜひ日本と中国の関係に関心のある学徒の方は行ってみるといいと思います。結構、面白い戦争博物館です。300円か500円の入場料で、5時間や6時間はゆっくりと見ることができます。特攻隊戦士の肉筆の遺書、西郷隆盛を負かした人の奥さんが使ったご飯べらや人間魚雷「回天」の本物など、ありとあらゆるものが展示してあります。その歴史館のなかに

入っていくと、2つの小さな映画館があります。1つは明治天皇と乃木大将についてのもので、これはあんまり面白くありませんが、もう1つは『私たちは忘れない——感謝と祈りと誇りを——』という40分ほどのものです。ナレーションで「私たちは忘れない、極東の小さな島国であった日本がなぜ戦ったのか、なぜ戦わざるを得ないところに追い込まれていったのか、私たちは忘れない」と書いてあるのです。

「われわれは間違っているのではない、戦わされたのだ、だからそれは正義の戦いである」と。では誰に戦わされたのでしょうか。陳列をじっと見ると、中国のことは書いてありません。中国の悪口はほとんど言っていません。ときどき抵抗したという程度にしか書いてありません。読んでいくとアメリカに戦わされたと書いてあります。嫌だったけれども、アメリカから日本に対して物議がこないようにと、それからあまつさえ、日本が真珠湾に奇襲攻撃をかける前から、アメリカはわかっていたけれども、ホワイトハウスで会議をして、後々やりやすいからやらせておこうという結論を出したというのです。それを知らずに日本は攻めていきましたというものでした。

アメリカ大使のシーファー (J. T. Schieffer) さんが、その陳列を見て不愉快であると言いました。あれは日本の安倍さんたちが考えているナショナリズム、日本の思いをはっきり言おうというのは、完全に反サンフランシスコ講和条約、反アメリカの論陣なのです。

だんだんとアメリカが気づき始めて、特に対米外交をやって事務次官を務めたような人たちはそれを見て真っ青になっています。「あれは困る。アメリカが気づいたら大変なことになってくる」というのですが、既に気

づいています。

そのようなところがわかってきたから、まあまあかなと。しかし、半分は心配していましたが、最近では政治情勢については少しほっとしています。

小選挙区制度をどのように思うかということですが、私は小選挙区制度導入に最後まで反対していた5人の悪いやつと言われていました。テレビ朝日の『ニュースステーション』で、改革を阻止する5人の悪いやつと指名手配されました。

そのとき、私の反対論は2つありました。小泉純一郎の反対論、党の総裁にすべての権限が集まり自由な政党でなくなると言いながら、総理になったあと自分がそのとおりにやったのです。今、自民党のなかでは、あまり意見を話せなくなりました。変なことを言う、公認を外されて無所属で立つと追っ手が来るのではないかという気分になっています。

それから、小選挙区制度では政策論争が起こると言いますが、起こりはしませんと言ったら起こってないでしょう。それから12年やっていますが、自民党と民主党の間での論争などほとんどありません。ただ野党だから消費税の値上げに反対するとか、野党だから守屋さんからお金をもらったことがある国会



議員がいるかもしれないようなスキャンダル論になっています。本当の政策論争になっていません。

年金の話も社会保険庁の職員がいいとか悪いとか、あれは年金論の本質ではありません。5,000万件の浮いた年金、全員に一人残らず本人に名寄せできるということは絶対ないのです。しかし、騒ぎになりました。安倍さんは頑張ったけれども。だから福田時代になったら、無理なものは無理だと言わないと駄目だと、私と伊吹文明さんで主張していました。やっと今度、発表しましたね。皆さん、どうですか。「従業員募集、ただし25歳以下」「クラブホステスさん募集25歳以下」という募集があったときに、27歳だけでも少し年齢をごまかして申し込んでみます。それで合格すると「実は2歳ごまかしていました」と言わないから、そのままの年齢で採用されるのです。

特に事情があって山形から大阪に来てホステスさんをやるという場合には、実家にわかれると困るから本名を言わないです。世の中には、そのようなことがたくさんあるわけです。先日、私の田舎の農家の60歳のおばあさんが、「昔は年齢と名前をごまかして大阪の南で5年働いて厚生年金を払っていた。おそらくその5年は5,000万件のなかの1つです。しかし、私は今、孫もできて平穏無事に楽しく老後を過ごしています。いい家庭を持っています。それを40年前のいろいろなことをわざと言ってまで、孫に、おばあちゃんホステスだったのかと言われる必要がどこにありますか、5,000万件のなかでふらふらしていればいいのです」と言うのです。

ですから、無理な面もいろいろあります。やはり本当にきちんとした政策論争ができず

に、このようなつまらないところで議論になるのは、やはり小選挙区で、今後、政界再編のようなことがあるとすれば、選挙制度の変更は不可避です。そうでなければ、政党再編、政界再編は論理的に起こりません。

日本は中選挙区のほうが、みんなが議論をして楽しい国になると私は思います。中選挙区時代には政権交代がありました。細川政権です。小選挙区になって12年、公約の政権交代はありません。おそらく、この次もありません。そのときには民主党はバラバラになります。中選挙区のほうがいいと思います。

●一高橋 どうもありがとうございました。本当はもっとたくさんの方からの質問を受けたいのですが、お約束の時間を過ぎています。本日は、大変ユーモアたっぷりの議員生活35年、中国と触れ合って四十数年、加藤先生の議員会館のお部屋に行きますと、大変まじめだということが一目にしてわかります。政治屋ではなく、本当に日本の将来、もちろんそのなかに日中関係も含まれておりますが、真摯な議員でいらっしゃる。政界は一寸先が闇と申します。場合によっては、加藤先生が大変な脚光を浴びる日が来るかもしれません。

今日は短い時間ではありましたが、皆さま方は今日のお時間を存分に楽しんでいただけたと思います。またいずれ機会がありましたら再登板をしていただきたいと思います。今日はこのへんでお開きにさせていただきます。改めて加藤先生に盛大な拍手をお願いいたします。

●一司会 加藤先生。改めてありがとうございました。皆さん、もう一度盛大な拍手をお願いします。本日は長時間に渡りご参加いただきありがとうございました。